

「袖中抄」声点考

秋 永 一 枝

(本稿のキーワード…袖中抄の声点・顕昭のアクセント・アクセント変化型・袖中抄の仮名一覧・声点注記歌の割合)

一

袖中抄廿卷は寿永二年(一一八三)頃六条家の歌学を修めた僧
顕昭の著した歌語の注釈書である。確実な成立年⁽¹⁾時については明
らかでないが、この大部のものが一朝一夕にできるものでもなく、
その上「古今集注・後拾遺抄注・散木集注」等、顕昭のほかの注
釈書と密接な関連をもつものである。顕昭がこれらの注釈書を編
む長い年月の間に書き留めたものうち、これはと思う難語につ
いて改めてまとめたものであるから、断片的な執筆の時期を含
めればかなりの長年月を要したわけで、単に何年の成立という完
成の年時を定めることに私はそれほどの意義を感じない。

たしかに、袖中抄より以前の著作と説の異なることもあるが、
一人の人間の考察に全く変化がないことはあり得ないし、まさに
索引でも作っておかなければ自説の異なりに気付かぬのはむしろ
当然で、この点我々として同罪であろう。袖中抄が顕昭の著作であ

ることに疑義をはさむ者は⁽²⁾もはや無かろうが、袖中抄に付された
声点からも顕昭の著作と⁽³⁾いってよい特徴を充分に示すことができ
る。

以下に袖中抄の声点注記善本四本を紹介し、更にその声点注記
について若干の考察を試みたい。伝本の詳細な解題は、後藤祥子
氏の「(袖中抄の)校本と研究」(解題)⁽³⁾を参照して頂くこととし、
ここでは声点や仮名表記に関して高松宮本を中心に述べることに
する。(以下出典の()内は省略する)

二

1 高松宮本

有栖川本・定為本とも称し、有栖川宮家・高松宮家に秘蔵され
た卷子本廿巻で、現在は文化庁に所蔵される。漢字交り片仮名本
で虫損は少ない。天地は二九・三センチ、鎌倉・室町書写の場合
一紙はほぼ四五・五〇四センチで紙つぎをする。界線は上部に

三線下部に一線あり、ともに薄墨の横野がひかれ、項目の出典和歌は上の句・下の句二行がきで、ともに上部界線の真下より初まり、一句ごとに若干空けることがある。この書写の方法は顯昭の他の注釈書における飛鳥井雅有書写本の系統に一貫してみられるものである。⁽⁵⁾ 界線二段めには顯昭の説、三段めは諸家の引用の説が記される。

本書は、一条御房藤原定為宛の書状などの紙背文書に書写された鎌倉時代の古写（楮紙）のほか、室町時代（楮紙）・江戸時代（斐紙）の補写がある。巻四・十一・十二・十八・廿には正安二年（一三〇〇）の奥書（十一以外には阿闍梨祐尊の名あり）があり、その首題と巻頭の数行は定為筆とされている。鎌倉写しは他に巻五・七・十三・十四・十五・十六・十七・十九がある。以上には江戸初期の補写を含むものがあるが、室町写しの巻一・二・六・八・九・十の六巻には江戸の補写はない。江戸の書写は巻三全巻と、巻廿の前半、巻五・七・十一・十五・十六・十九の六巻に数葉ずつある。全二十巻の仮名一覽はスペースの点でむずかしい上大差も認められないので、今巻十一・十二（鎌倉写）、八・九（室町写）、三（江戸写）の複写数葉ずつより片仮名の一覽を作成し、表一にまとめてみた。

鎌倉書写でも、巻によって別筆であったり、更に室町・江戸と書写の時期は異なったりしていても、「キスセツテネマワキ」などに古体の交る相似した片仮名が用いられている。これは、鎌倉書写が、同一古写本からの写しであり、室町書写も、その字形と巻六の奥書によって、同じ鎌倉書写を転写したものと分る。江戸

書写もまた同様で、巻三をはじめ補写の部分も同じ片仮名の古体を交えている。「校本万葉集」⁽⁶⁾のいうように、紙背文書が名筆のための切り取りで、先に鎌倉書写を転写して入れかえ、改めて裏打ち・表紙など一括装幀が施されたことが充分首肯される。次に奥書を鎌倉・室町の書写から一例ずつ上げておく。

巻第廿（鎌倉書写）

正安二年庚子六月廿日書写之執筆

祐尊

校了

巻第六（室町書写）

書本云

建治二年五月廿二日未刻終功自今朝始之

又云

弘安元年戊寅夏四月甲寅朔癸酉書写了

權律師玄寬

正安二年庚子五月十六日書写了

執筆阿闍梨祐尊

声点は朱の星点・圈点、墨の星点・圈点があり、更に朱墨のまじるもの、墨の上に朱を重ねたものなどがある。圈点は殆どが二筆書だが、星点と判別しにくい巻もある。濁表示には双点を差すこともある。全体としては丁寧な注記が多いが、巻六（室町写）や十六（鎌倉写）のように乱雑な注記もあり、特に巻六には不正確な注記がまともに現われている。片仮名には朱星点注記が多いが、巻四や十二のように多く朱圈点注記のもの、巻十一や廿

表 1

高松宮本袖中抄の片仮名字形

K 鎌倉書写、M 室町書写、E 江戸書写、★印は他巻のもの

E	M		K			E	M		K		時
三	九	八	十二	十二		三	九	八	十二	十二	巻
サ	ササ	サササ	ササ	サ	サ	ア	ア	ア	ア	ア	ア
シ	シ	シ	シ	シ	シ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
セ	セ	セ	セ	セ	セ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ

E	M		K			E	M		K		E	M		K		時
三	九	八	十二	十二		三	九	八	十二	十二	三	九	八	十二	十二	巻
ウ	う	ウ	ウ	ウ	ラ	イ	イ	イ	イ	イ	マ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
						ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
リ	リ	リ	リ	リ	リ	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ
ル	ル	ル	ル	ル	ル	メ	メ	メ	メ	メ	メ	子	子	子	子	子
レ	レ	レ	レ	レ	レ	モ	モ	モ	モ	モ	モ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ロ	ロ	ロ	ロ	ロ	ロ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ワ	ワ	ワ	ワ	ワ	ワ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
キ	キ	キ	キ	キ	キ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	フ	フ	フ	フ	フ
エ	エ	エ	エ	エ	エ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	袖中抄	袖中抄	袖中抄	袖中抄	袖中抄	袖中抄	ホ	ホ	ホ	ホ	ホ

表 2 (K 鎌倉写、M 室町写、E 江戸写。○は書入・声点注記あり。)

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	卷		
M	M	M	K(E)	M	K(E)	K	E	M	M	書写	奥	書
/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	正安	校了	星
/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	星		
/	/	多鮮明	(E)鮮明も	多形雜	薄多	少	多鮮明	多鮮明	多鮮明	星	圈	朱
/	/	/	/	/	少	薄多	/	/	/	圈		
/	/	/	/	○	少	少	/	/	/	星	圈	墨
/	/	○	○	形雜○	多	○	/	○	/	圈		
/	/	墨圈	(朱星)墨圈	墨圈	(朱墨)墨圈	朱墨圈	朱星	墨朱星	(朱星)	漢字に多い点	他三本の声点	
京	京、前極少	京、前	京、前	京	京	京少	京	京	京			

廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一
K E (後前)	K E ()	K	K	K E ()	K E ()	K	K	K	K E ()
○	/	○	/	/	/	/	/	○	○
○	/	○	/	○	/	○	○	○	○
E 多	(E 多 も)	多	多	(E 多 も)	(E 多 も)	/	/	○	(E 少)
/	/	/	/	少	○	/	/	多	/
K 多	/	少	少	少形 雑	/	/	/	/	K 多
(E K) ○	○	○	○	/	/	少	少	○	/
(E K) 墨圈	(E も) 墨圈	墨圈	墨圈	朱圈	朱星、 朱圈、 (E も)	墨圈	墨圈	墨圈	/
京少、 前極少	京、 前	京、 前	天多、 京少、 前少	京少	京少、 前少	京少、 前少	京少、 前極少	京、 前	京、 前

(後半)のように多く墨星点注記のもの、巻十六のように墨星点の上に朱星点が重なるものなどあり、ともに鎌倉書写である点が注目される。特に朱圈点は鎌倉書写にあって室町・江戸書写にはみられない。巻により朱墨や形態が異なる上に、巻九・十(室町書写)には声点注記がなく、巻十三・十四(鎌倉書写)には墨圈点のみでしかも極く少数であるなど注記数にも開きがある。今これらを書写の時期を勘案して一覧にして示すと(表2)のようになる。

声点には一部分誤写・誤脱があるものの、概ね正確に移点しており、声点注記時期を問わず声点本としての価値が高い。

声点の位置は、他の顕昭本と同じく、片仮名及び和語の漢字表記には平声・上声の位置に注記されるが、「ヤマトヒメ」のトなどに平声軽とおぼしき点がある。字音語の漢字には平上去入のほか平声軽がある。

なお、稀に合符が示されるが、中央は音合符、左は訓合符である。

2 天理図書館巻十七零本(函架番号9112イ33)

卷子本一軸で、天地は二九・三センチ、一紙はほぼ五〇センチで紙つぎをする。漢字交り平仮名本であるが、振仮名は片仮名で記される。片仮名には古体を含むが、「サ」の古体(字母「左」)がみられるなど必ずしも高松宮本と一致しない。界線は薄墨で上部に二線のみだが、更に一字下げで三段めに諸家の説を引くなど、高松宮本の書式と同様である。裏打ちするが、その後とみられる虫損が稀にある。

声点は仮名には朱星点が平声・上声の位置に注記される。「むすひまつ」「たふさと」には朱の圈点かともみられるものがあるが、これは朱点を差す時に筆尖をやや回し気味にした為かもしれない。朱色は濃く鮮明だが盛り上がらない。漢字には墨二筆書圈点が平上去入輕の位置に注記されるが、二字熟語の一方にのみ差声されることもある。

朱墨ともに稀に濁表示を示す双点がある。「しひの」などは「慈悲」で「椎」ではないことを示すのに有効だが、「ユヒマキ」(「鑑」の振仮名)などは必ずしも双点を示す必要が認められない。「寄物」(へ上^輕入^輕)の「物」の墨圈点の右に「一」があるのは、「一」で濁表示を示すと思われる。

「かり」(符)の「へ上平」を削消して「へ上」にするなど、声点は丁寧に注記されており、零本だが鎌倉期書写の声点本としての価値が高い。

合符は稀だが声点注記の部分に多くあり、訓合符は左に、音合符は中央に記される。なお奥書はない。

3 京都大学図書館本(函架番号平松第七門シ21)

平松家旧蔵本。本文十冊目錄一冊の冊子本で、縦は二五・五センチ、横二〇センチの袋綴である。漢字交り平仮名本であるが、振仮名は片仮名であり、高松宮本・天理本に比して古体は少ない。

江戸初、延宝七年(一六七九)の識語が「三之四」「九之十」を除く八冊にあり、いずれも同年五月から六月にかけてのものであり、次に一例を上げておく。

延宝七年五月□四日一校了（一・二の末）

また十二・十四・十六の巻末に文字遣など多少異なるが、大凡左のような奥があり、4の前田尊経閣本（兼冬書写本）と校合したことがしられる。なお、巻四・八・十の末には兼冬の奥書が貼布してある。

本云以兼冬之御本加事書」遂一校訖（十二の奥）

声点は朱星点が殆どで、仮名には平声・上声の位置に注記される。朱星点は次のように漢字に差される場合もあり、字音語の場合には「風」に平声軽がみられる。

伊勢のへ上平平（十二） 宇治河へ平平〇（十）

美豆良へ平平平（七） 風姿へ平平（五）

「風」に平声軽を差すことは、古今集真名序の伝顯昭筆伏見宮家本に三か所、家隆本（伏見宮本とはば同声点のもの）に二か所みられることでもあり、底本に忠実に移点したものであろう。但し一般には漢字には墨圈点が平上去入の位置に注記されている。また朱墨ともに濁表示を示す双点がある。

声点は分明でほぼ正確であるが、「しら波」へ平平平（波）のように漢字に二か所注記してあるのは、「なみ」に差された声点を移点してしまったもので声点についての理解の乏しさを語っている。

巻四は声点（朱点）注記がごく少なく、巻十三・十四・十九・廿には朱点なく墨圈点のみ、十五・十六は標題に朱点が少し付されるのみである。巻一から六、九・十二の片仮名振仮名には朱星点が多く注記される。

本書は初めは丁寧に書写されるが、だんだん早書となり、声点も初めは丁寧な星点だがだんだんと雑に打たれるようになっていく。墨の声点は片仮名振仮名や書入れと同時に付されたものらしく、墨色が濃い。「一校了」の文字も同様である。巻九の「吾ア媛田」（片仮名にへ上上平平の声点）は、「吾媛」が墨色薄くその他が濃いため、「田」を挿入してから振仮名を書き、次に差声したことが窺われる。なお、訓合符は左、音合符は中央である。

4 前田尊経閣本（函架番号1319 貴）

一条兼冬筆本。本文十冊の冊子本で、縦一九・七センチ、横一五センチ（前後）の列帖装である。漢字交り平仮名本であるが、振仮名は片仮名で古体は少ない。「あかしの浦ウミ」の（十二）のように平仮名の振仮名が稀にみられる。

「五之六」の奥書に示すように天文十四年（一五四五）の十月から書写校合を始め、翌天文十五年十二月下旬までに十八歳の兼冬が「愚意」を頭書したもので、「七之八」の奥には次のようである。

天文十五年二月上旬「加書写一見校畢

右大将（花押）

同年十二月中旬愚意趣」休筆墨者也

内大臣兼冬

十八歳

声点は朱星点が殊どで、仮名には平声・上声の位置に注記される。二筆書墨圈点は殆どが漢字注記だが、稀に左のように片仮名

や平仮名にも注記される。

橙へ宅耕反。タウトヨム(十四)

又食とかきたれは声に志くと云歟と「たまもかりしく」の注)〈平(双点)・上〉

字音語に付された墨圈点は、平上去入のほか入声輕がみられる。また、朱墨ともに濁表示を示す双点がある。

声点注記のない巻は一六、十、十六で、巻九には貼紙一枚に「神今食へ去上入」新書會へ去上平イ訓如此」として墨圈点が注記されるのみである。このほか、十三・十四・十五・十七・廿は注記少なく、十九・廿は字音語に墨圈点が差されるのみである。

今前田家本の声点注記を中心に、巻別に高松宮本・京大本と比較してみた。これは文節ごとにくらべた大ざっぱな調査だが、それでも表3に示すようにきわめて京大本に酷似する。声点の異なりの大半は、踊り字や文字の小さい「ろ」や単双の相違などで、これらはどの声点本の場合にも共通することである。これらを捨象して「京大本と同じ」項に合わせると、前田家本の声点は約九四%が京大本の声点とはば同じということになる。前田家本の注記箇所京大本の声点がないか、異なるかして、高松宮本と同じというのはわずか七文節に過ぎない。但し、前田家本になく、高松宮本・京大本にあるものはここでは問題としていない。なおこの表では、いわゆる複合動詞は一語とし、神名などはアクセントによって適宜文節を切ったので、概算とお考え頂きたい。

表3 前田家本声点注記

計		廿	十九	十八	十七	十五	十四	十三	十二	十一	九	八	七	巻	
469 (B)	434	1	11	67	7	6	0	1	121	66	1	79	74	同*	京本
	35	2	5	2	2	1	0	0	8	3	1	4	7	ほぼ同**	本に
7		0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	1	1	異、京本無、高本同	
24		0	2 (1)	2 (2)	1 (1)	0	2	2	2 (2)	1	0	6	2	孤前 例本 ***	
500(A)															
B A =		3	19	73	11	7	5	3	133	70	2	90	84	前 計 本	
93.8%															

* 声の?は無視。 ** 一字分の無注記を含む。
*** () 内は京本と注記箇所同、声異なるもの。

表4 三本の袖中抄に引用された和歌中、声点注記のある歌の割合

	(A) 和歌数	(B) 声点 あるもの	(%) (B)/(A)
総 数	*1133	*477	42.1
万 葉 集	*540	*269	49.8
古今集(序をぞく)	* 90	41	45.6
後 撰 集	* 47	16	34.0
拾 遺 集	31	13	41.9
後 拾 遺 集	43	15	34.9
金 葉 集	6	0	0
詞 花 集	8	1	12.5
古 今 六 帖	43	7	16.3
その他の歌集 ⁽¹⁾	10	2	20.0
歌 合	* 37	10	27.0
六 百 番 歌 合	2	0	0
堀 川 百 首	17	6	35.3
神 楽 歌	* 16	9	56.3
催 馬 楽	* 12	9	75.0
風 俗 歌	4	2	50.0
私 家 集			
(散木集注)	* 45	21	46.7
(その他)	* 94	* 27	28.7
伊勢物語	* 29	8	27.6
その他の物語等 ⁽²⁾	* 25	6	24.0
俊頼髄脳	16	10	62.5
その他の歌学書 ⁽³⁾	18	5	27.8

(*は延数)

(注1) 千載集, 続詞花集, 日本紀寛宴和歌, 新撰万葉集, 和漢朗詠集, 良玉集

(注2) 大和物語, 源氏物語, 栄花物語, 大鏡, 今鏡, 土佐日記, 日本書紀, 続日本紀, 靈異記

(注3) 歌経標式, 忠岑十体, 後拾遺問答, 綺語抄, 奥義抄, 袋草子, 童蒙抄

顯昭の注記にとって声点注記が密接不可分であることは、「後拾遺抄注」の注釈歌につけられた声点注記歌が半数近くに及ぶことでも伺われること既に述べた如くである。即ち、「京大本後拾遺抄注」に注釈のある歌数は詞書も含めて一一八首、このうちに一文節でも声点の差されている歌数は五四首、つまり四七・七六%の歌に声点が注記されている勘定になる。更に「散木集注」⁽¹⁰⁾で

三

は、現存の注釈歌数一〇〇首に対し、声点注記歌数は九三首で、実に九三%の歌に声点が記されている。

幸い、袖中抄に引用された和歌の出典索引が後藤祥子氏の「校本と研究」(577ページ)にあるのでそれを利用して頂き、それらの歌に高松宮本・天理本・京大本で声点が注記してあるかを調べてみた。一首の歌に一か所以上の声点注記があれば1とした。また、二本以上に声点注記がある場合も声点の異同に関係なく、ひとしなみに1として数量化した。但しここでは古今集の

序は除外し、詞書は含めることとした。このうちには勿論声点の後入れもあり、脱落もあり、どれを後入れと認定するかはむずかしいことで、今回は不問とした。ここで前田家本を省いたのは、表3に示したように京大本の声点注記に殆ど重なりとみるためである。表4では、出典別に引用和歌集とそこに声点が注記された数を延べ数で示し、引用和歌数を分母に、それに声点注記ある和歌数を分子にしてパーセントを算出した。

数値の高いのは「催馬楽」の七五%、「俊頼髓脳」の六二・五%、「神楽歌」の五六・三の順だが、引用和歌が一二首・一六首・一六首と少なくともパーセントにするような数とは言いがたい。せめて引用和歌四〇首以上として上位から五位までを選ぶと、次のような順位となる。

「万葉集」が五四〇首中二六九首で四九・八%、「散木集注」が四五首中二二首で四六・七%、「古今集」(序を除く)が九〇首中四一首で四五・六%、「後拾遺集」が四三首中一五首で三四・九%、「後撰集」が四七首中一六首で三四%である。この中にはそれぞれ、顕昭の注釈書の声点注記歌と一致するものも多いがここではすべて省略した。

延歌数が一一三三首に対し、声点注記のある延歌数は四七七首で、何と四二・一%にも達している。これは「後拾遺抄」の四七・七六%には少し及ばぬが、袖中抄には声点注記を全巻欠除する巻(例えば高松宮本室町享の九・十など)があり、脱落や後入れもあることなど考慮すると、顕昭の声点注記時には四五%には近付くものと推定される。これは他の声点本に比べて顕昭注釈本の著

しい特徴というべきものである。

四

二で述べたように、高松宮本は漢字交り片仮名本、他の三本は漢字交りの平仮名本だが、四本ともに振仮名は片仮名である。また、高松宮本(鎌倉写)と天理本の片仮名には、共通の古体を多く交えるが、これはこの時代に常用のもので、二本のみの共通項とは言いがたい。

顕昭の他の声点注記古写本のうち、古今集序注・古今集注(平仮名本あり)、拾遺抄注・後拾遺抄注はいずれも漢字交り片仮名本である。更に顕昭は博引旁証の歌学者で、和名抄・日本書紀・古語拾遺といった、漢字もしくは片仮名書の声点注記本を多く引用する。また僧籍にあることから、經典の類の漢籍も座右にはあろう。六条家系統伝清輔本古今集にも片仮名書があり、伝顕昭筆の伏見宮家本古今集も片仮名書である。この時代、贈答の和歌や勅撰集などの歌集はいわゆる平仮名で書かれていたとしても、顕昭は漢字片仮名交りの書写の世界に身を置いていたのであり、歌の注釈書を書く場合もまた同様であることに抵抗がなかったらう。あれこれ勘案すると、袖中抄の自筆原本も恐らくは片仮名漢字交りで書かれたものと推定される。

声点もまた、顕昭の差声時にはもう少し均一な形態であったらう。他の顕昭本でみられるように、本行の片仮名及び振仮名には朱星点、漢字には二筆書墨圈点が一般で時に朱星点を交えるといった程度ではなかったか。高松宮本は複数の人によって書写さ

れた結果、声点の形態に統一がとれなかったが、定為書写とされる巻頭部分に朱圈点が多いのは、声点が朱書のものから移点したためではなからうか。卷廿の後半鎌倉書写のものに墨圈点が多いのは疑問だが、江戸書写のものが朱点で統一されているのは、貴重な裏書文書を有する古写よりの写しだからではあるまいか。鎌倉期書写本の筆者と声点注記の關係は、くわしく調査する必要がある。

ともあれ、四本を通じ声点の認定に問題となったのは振仮名への差声で、文字が小さい上に空間がせまく、必ずしも定まった位置に差されていない。これは原本も小字故にあいまいであったものもあるうし、転写の際の位置のずれも大きいだろう。本行の場合でも小字で書く習慣のある踊り字や「ろ」、平たい字体の「ヘツマ」「ツ」などに迷うものが少なくない。顯昭の片仮名本では、古今集を初め、「リ」の平声が第一画のすぐ下にあることも特徴の一つである。

高松宮本の江戸写しには、声点を理解しないことによる誤写が目立つ。卷三を例としても「ワカヒノモトノ」には△平○平平平○とあるが、「カ」の平声は「ヒ」の上声の誤写であること、京大本の△○○上平平上○△によって立証されよう。同じく「ヒトラミツ、ノ」△○○平○○上上上△の「ヲ」の平声は「ミ」の上声の誤写で、京大本には△○○○○上上上△とある。「タツヲマソテニ」△平上平○平平○△の「ヲ」の平声は「マ」の上声の誤写で、京大本は△平上○○上平平○△とある。

とは言え、高松宮本鎌倉写の部分すべて顯昭の差声のままでは

はない。例えば次のように新しいアクセントの型がみられるが、これは言いかえれば書写の人が自己の、或いは自派のアクセントを差すことができるということである。（*は振仮名）

(十二) アカタノ(県) △上平○○△、京大本・前田本は△平平○△

(十二) ヤマトヒメノ(倭姫) △上平^輕上平○△、京大本は△平上上○○○△、前田本は△平平^輕上上平○△

(十七) シカノヤマコエ △上上平上上平平△、天理本は△上上平平平平△

(廿) ウマシ(エヲトコ・エヲトメ) △上上上△

ここで、高松宮本鎌倉書写の人がたとえ数か所でも自身の変化型アクセントを記したことに注目したい。右は天理本・京大本・前田家本が変化以前のアクセント、恐らくは顯昭注記の声点を転写しているのであるから、顯昭の声点とは異なったものとみてよい。また「校本万葉集」によれば「正安二年の奥書が書写当時のもので無いにしても、定為の年代、裏面文書の年代、本文の書風紙質等より推して正安以後あまり遠からぬ時代の書写」と考えられている。とすればアクセントの個別的な変化の時期は正安二年にほど近い頃まで過ることが可能となる。

定為は為氏の子、母は兄の為世ともども飛鳥井雅有の姉である。雅有は「古今集注」その他顯昭の声点本を書写した人であり、定為が袖中抄を書写したのは十五歳ほど年長の伯父雅有の影響が大きかったものと思われる。その雅有書写の「古今集注」の写しには、「同じ」の語に△平平^輕△でなく△上平^輕△を注記すること

既に書いた。また定為は、「六巻抄」の序及び奥書にみられるように行乗に古今集の講義をしているが、これにも声点の注記がある。同じく行乗の名が相伝系図にある「毘沙門堂古今集註」には、二条家では大和歌を「へ上上上上平」とよむという註がある。これらは「袖中抄」の「倭姫」に「へ上上^平上平」の差声があることと無関係ではあるまい。

即ち、「袖中抄」の上記の変化型は、顯昭自筆本にあるものではなく、定為もしくはその周辺の人たちのアクセントが誤って混入されたものであろう。特に振仮名は小字であり、注意が行き届かなかったことも想像される。

変化形は高松宮本のみではない。例えば天理本にも左のような例があり、こちらは高松宮本鎌倉写に変化以前の差声がなされている。

(十七) たまへの (玉江) へ上平平平 天理本、へ平平平〇

高松宮本

これもまた、天理本書写の人のアクセントが混入したものであろう。

なお、袖中抄の声に関して最も著明なのは、「サヲ (京大本「さほ」ト上声可詠歌、サホト平声可詠歌」に始まる「サホヒメ」(巻三)の条であろう。既に諸賢によって引用され、筆者もたびたび触れたことであるが、この時代に顯昭が「或ハカミニヒカレ或ハシモニヒカレ便ニヨリテ声ハ不定也」と記し、複合によってアクセントの変化することを述べたのは卓見といえよう。

但し袖中抄の解釈には顯昭独自のものがあって、時にそれは声

点による意義認定の壁ともなるし、また注釈の解説に声点を利用する鍵ともなる。これについては紙数の関係上別稿で報告する。四本それぞれの声点に関しては、後藤祥子氏と共編の「袖中抄声点付語彙索引」(アクセント史資料索引六)を参照して頂ければ幸いである。

注(1) ①岡田希雄「袖中抄の著述年代に関する疑問」(『国語論文』二〇四、昭七・四)、②橋本進吉「法橋顯昭の著書と守覚法親王」(『史学雑誌』三一ノ三、大九・三。『伝記・典籍研究』に収録)など。

(2) 注1①に「明治の学者として袖中抄を偽書として斥けたのは、藤岡作太郎博士の日本評論史唯一つあるのみ」とある。

(3) 橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』(笠間書院)487ページ。「解題・索引篇」等、後藤氏執筆。

(4) 一紙の全長平均は、文化庁移管時の調査による。

(5) 拙稿「京大本『後拾遺抄注』声点考」(『早大文学研究紀要』二八、昭五八・三)でもすでに触れた。

(6) 「定為本袖中抄」(『校本万葉集』首巻214ページ)による。橋本進吉博士の執筆か。

(7) この形の濁音符については、小林芳規「漢籍の古写本に用ゐられた濁音符―特に博士家に於ける使分けについて」(『広島大学文学部紀要』二五ノ一、昭四〇・一二)に例が多い。

(8) 拙稿「古今集における声点の認定について」(『国文学研究』八八、昭五九・三)

(9) 注5

(10) 拙稿「天理本『散木集注』声点考」(『金田一春彦博士古稀記念論文集一』昭五八・一二参照)

(11) 拙稿「古今集声点本における形容詞のアクセント」(『国文学研究』八八、昭61・3)ですでにふれた。

(12) 拙稿「『やまとうた』と『やまとうり』」(『国文学研究』八七、昭60・10)ですでにふれた。

本稿は昭和六十二年度文部省科学研究費助成による研究の一部である。貴重な資料の閲覧を御許可下さった、文化庁・天理図書館・京都大学図書館・前田尊経閣の関係各位に厚くお礼申し上げる。私事ながら、高松宮本はネガフィルムを手にしてから閲覧の御許可を頂けるまでに三十年要したことであった。

新刊紹介

堤十女橘著

『風は景と共に暖かし』

——明治・大正・昭和に生きる——

この書名は、九十歳の現在も身心共に元気に研究を続けておられる著者の生涯の研究主題である白楽天の詩句からとられた。明治・大正・昭和三代の六十余年間を教師として生きた、その随想集である。

幼時を過ごした江州盆地の農村の自然と暮し。師範学校を卒業後、小学校の教師をしつつ、初志を貫いて早稲田大学に入学。昭和六年からの中国留学では書物との出会い、学者たちとの交遊の充実した楽しい年月が記される。

高等小学校、特殊小学校、中学、高等学

校、陸軍予科士官学校を経て、早稲田大学(中国文学科設置の経緯など)と津田塾大学では四十年余り教鞭をとられた。

教師としては「教えるよりまず育てる」という姿勢であった。早稲田大学の多くの秀れた学者たちから努力して学びとられた事柄を、教え子に伝えるに真摯な心で当たられた。心の「ふれあい」であった。

一つの理想教師像を生きてきた人の一生の、興味深い話の数々が楽しく語られる。それぞれにゆかりの思い出を重ねつつ読んでいただきたい書物である。

(昭62・4 白帝社 B6判 二四七頁 三〇〇〇円) 【青井紀子】

徳田武著

『日本近世小説と中国小説』

本書は日本書誌学大系の五一にあたり、

近世の小説とくに読本と中国小説に関する論文を三十九篇収めた大著である。「読本前史」、「読本の成立」、「長編読本の成立と展開」、「読本と近代小説」と四部の構成をとり、その形成から近代への影響まで幅広く論考が及ぼされている。

読本と中国小説の関連については従来漠然と指摘されるにとどまっていたが、いかなる中国小説のどの処を採り入れそれを創造していったかを著者は個々に解明してみせる。それは著者の語学の実力と豊富な読書量によって初めて成し得たと言えよう。従って近世専攻の方はもちろんのこと、中国文学に関心ある方へもぜひお勧めしたいのが本書である。

(昭62・5 青葉堂書店 四六版 八九五頁 三八〇〇円) 【佐々木亨】